

都

市化の進んでいる市川ですが、昔ながらの自然が今も残っています。大町で約10haの山を所有している竹内一雄さんに山を案内していただきました。7代目当主である一雄さんは先祖が育んできた山を引き継ぎ、定期的な管理を行っています。



次の世代のために、森のいのちを守る

市川みどり会

竹内一雄さん
Kazuo Takeuchi

山には70〜80年生の杉や檜と、竹が植えられています。夏と冬の年2回、木の下に生えている下草を刈って手入れをしますが、夏は作業中に虫に刺されてしまうのが難点で、蚊取り線香が手放せないと言います。

竹内さんは現在、社会復帰をめざしている知的障害のあるかたと一緒に、山の管理にあたっています。手入れの行き届いた山は、多様な動植物の宝庫です。ホオジロ、メジロ、きれいな水があるところではかき息できないカワセミ



もいます。

木や植物は空気を浄化し、温暖化防止にもつながります。土や木の根は雨水を蓄え、私たちが生きていくのに欠かせない水をもたらしてくれます。

「すぐ近くの自然公園には、今でも湧き水が流れています。これも山があるからなんだろうね」と山を愛おしうに眺める竹内さん。ありのままの自然を受け入れ、それを大切に守ろうとする気持ちが伝わってきます。

また、竹内さんの山は、ヤマユリが見られる場所として地元では有名です。以前は市川の他の場所にも自生してい

ましたが、今はまとまったヤマユリが見られるのはここだけになってしまいました。

ヤマユリが毎年見られるのも、定期的な山の管理のおかげです。間伐をすることで、山の斜面にも適度な光が当たるようになります。また、周囲の下草を刈ってやることで、生育に必要な光と栄養分が保たれます。「花の時期は短いけれど、ヤマユリは本当にきれいですよ。花を見るために、それ以外の季節は手入れをしているようなものだからね。それに、ヤマユリを見に来るかたがたの喜ぶ顔を見るのがうれしいんです」と竹内さん。毎年見ごろになる7月20日前後には山を一般開放しています。竹内さんは山林所有者の団体「市川みどり会」で、緑地の保全や、緑化の推進に関する各種調査研究も行っています。穏やかなまなざしの中に、次世代に緑を守り育てていく強い意志を感じました。

上：手入れの行き届いた竹林。竹は主に垣根や竹細工として利用される。下：毎年7月、華麗な白い大輪の花を咲かせるヤマユリ。

花と緑

特集
いちかわの花と緑 ①

庭の花や緑、公園の花壇、まちの林など、家の近くや通り道で目にする市川の花と緑。いつも気にかけてみんながよりどころとして感じている花や緑がたくさんあります。そんなふうには、さりげなく咲いている花や気持ちのいい緑を、実は私たちの知らないところで、大切に守り育てているかたがたがいます。

守り人



花壇は手段、目的は花壇づくりが地域住民同士の交流の場となること

花クラブみょうでん

駒田房江さん
Fusae Komada



「花クラブみょうでん」が世話をする花壇は、地面の傾斜に合わせてひな壇型につくられていて、高さも作業がしやすいようにおとなの腰丈ほど。「花クラブみょうでん」の会員数は18家族26名。

花クラブみょうでんホームページ
<http://hanamyoden.hopto.org>

花

の苗にバケツ、じょうろ、スコップを手にした「花クラブみょうでん」（代表・駒田房江さん）のメンバーが、熱心に花壇の手入れをしています。

市川市が募集した「花植えボランティア」に駒田さんが応募したのがきっかけで、妙典公園に花壇がつくられることになったのです。駒田さんは、花壇の維持はとも一人では無理と、公園に隣接する高層マンションのインターネットホームページや、掲示板を使って、一緒に活動するメンバーを募り

ました。さらに、ガーデンングに詳しい地元の知人を誘って、妙典公園の花壇の世話を「花クラブみょうでん」が

きたのです。まだ発足間もない若いクラブですが、メンバーのやる気は満々です。花が好きだけでなく、触れ合うことの楽しさ、さまざまな知識の交換そして仲間づくりに、メンバーは集ま

通常の活動は4〜5人の班に分かれて、交代で毎日の水やり、雑草取り、花がら摘みをしています。花の入れ替えともなると、メンバー総がかりで行われます。

悲しいのは、種をまいた直後に足跡

を発見したとき。そして花壇をロケット花火の発射台代わりに使われたりすること。せっかく開いた花を切られたときは、本当にショックだ

うです。それでも、水やりをしているときに、「きれいにしてくれてありがとう」なんて声を掛けられると、とても嬉しくなってしまうと、メンバーのかたがたは、口々に話します。

咲き終わった花から種がはじけ、丁寧に種を集めます。持ち帰ってベランダのプランターにまくのだそうです。うまく芽を出すかどうかはまだ先のことですが、種から育て、花壇に植え替え、そして再び種を持ち帰る。「花壇からつなげていく喜びです」と目を細め

ます。

この花壇づくりは、見事な花壇をつくることではなく、地域の交流が第一の目的ですが、やるからには、きれいに花を咲かせたいと、意気込みを語ります。

「会員のほとんどが隣接するマンション住民なので、地域のかたにも参加して欲しいのです。ぜひ一緒に花壇を通して交流を図りましょう。人が増えれば、花壇を広げていくこともできるし、活動ももっと活発になります」と、駒田さんはメンバーの募集と、今後の抱負を語ってくれました。